

## 漕 人 伝

原作：中島敦「名人伝」／集英社文庫「李陵・山月記」  
太田川 BC ポートライフ No.100 より再々編集

大和の国に住む紀昌(きしょう)という男が、天下第一の漕の達人になろうと志を立て、当今オールをとっては彼に及ぶものはないと言われた飛衛(ひえい)をはるばるたずねその門に入った。飛衛は紀昌にまず水面を見続けることを命じた。その日からというもの、紀昌はオールを手にすることなく、毎日毎日岸辺に行っては川を見続けた。波の日も凧の時も、彼は水を見続けた。

二年の後には、波の山も谷も手に取るように見え、先が読めるようになった。そこで紀昌は飛衛のところにいき、これを告げた。飛衛は言う。波が読めるだけではまだ漕を授けるに足りぬ。次にはブレードを見続けよと。紀昌はふたたび漕ぐこともなく、ただ人の漕ぐブレードを見続けた。

はや三年が惜しげもなく流れた。ふと気がつく、紀昌はもはや動きの全てが手に取るように感じられた。水を押すブレードの手ごたえは、まるで自らの手を水に浸けているかのように、水の冷たさまでを感じられるに至った。これを師に報じた時、飛衛ははじめて「でかしたぞ」と褒め、それから漕術の奥義秘伝をあますところなく紀昌に授け始めた。

五年の修行の甲斐あって、紀昌の漕ぐブレードは、まるで水しぶきをあげず、鋭利なナイフのように水の中に滑り込み、そして水にはいつブレードが抜かれたのか解らないほど涼やかに水から抜き出されるのだった。艇は音もなく進み、その速さに人々は息を呑んだ。

もはや師匠から学ぶべきものはなくなった。紀昌はあるときふと考えた。今、天下一の漕人になるためには、師匠と自分とどっちか速いか並べなくてはなるまい。川面に散歩する飛衛に出合った紀昌は、戦いを挑んだ。競漕は優劣つけがたく、どこまでも続いた。飛衛がスパートをすれば紀昌もこれに続き、紀昌がコンスタントにはいれば飛衛もまた間髪いれずにコンスタントに落とした。このとき初めてお互いはその力の互角を悟った。

飛衛はこの危険な弟子に向かって言った。もし、これ以上の奥義をつかみたいならば西の湖におられる甘蠅(かんよう)老師を訪ねよ、と。老師の技に比べれば、我々の漕のごときはほとんど児戯に類する。

一月の旅の後、紀昌はようやく静かな湖にたどり着いた。気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。紀昌はこの人が名人かと訝りながら、まあいいさとばかり湖を全力

「名人伝」は弓の名人の話。この話を下敷きにして、漕艇の名人？の話を書いてみた。もちろん、「名人伝」には及ぶべくもないが、ちょっと面白いなと思ってもらえたら、「名人伝」のほうをぜひ読んでもらいたい。

で漕ぎわたり、その速さを誇示した。一通りできるような、と老人が穏やかな微笑みを含んで言う。だが、それは所詮、漕之漕というもの、好漢未だ不漕之漕を知らぬと見える。では先刻の業を今一度見せてくれぬか。途端に湖は大洋の嵐となり、襲い来る風と波。紀昌は漕ぐどころではなかった。老人は少し悪戯っぽく笑いながら、では漕というものを御目にかけようかな、と言った。老人はオールもつけず艇にも乗らず、しかしその体は嵐の中を悠然と漕ぎ進んだ。紀昌は慄然とした。

九年の間、紀昌は老人の下で修行を積んだらしい。紀昌がようやく山から降りてきた時、人々は紀昌の顔つきが変わったのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂は影を潜め、穏やかな顔つきだった。紀昌は、もはやオールを持つこともなく、しかも艇さえ乗らずして川を渡っているのを見たなどという噂がたつほどだった。

さらに三十年が流れた。その間、だれも紀昌がオールを手にするのを、またオール無しで漕ぐのを見た者はいなかった。もはや老いた紀昌が、あるとき艇庫に立ちよって、ふと壁にかかる道具をみた。これはなんと申すものでいったい何に使うのかねと、艇番に尋ねるのだった。紀昌に至ってはすでに、実体のオールが不要なだけでなく、漕ぐという概念すらないままに、彼の魂は自由に水の上を飛びまわることができたらしい。

ところで。(後日伝え聞いたところによれば)水も温み始めたある早春の日、紀昌は水辺に戯れる鴨の子の、のどかな鳴き声にふと足をとめた。そのつたない泳ぎにひととき見入った後、紀昌は呟いた。ああ、私の一生はなおこの鴨の子の1日に及ばないと。

